

Silvered Innovations プロジェクトの発足に寄せて

九州大学名誉教授 有川節夫*

日本は高齢化が進んでいる。厚生労働省の発表によると、65 歳以上の人口は総人口の 3 割近くに達し、令和 6 年の平均寿命は、男性は 81 歳、女性は 87 歳である。10 年ほど前によく見聞きしていたリンダ・グラットンの「人生 100 年時代」という言葉が現実味を帯びてきた。

サラリーマンの多くは、60 歳で役職定年となり 65 歳で定年を迎える。定年を迎えた後の 20 年以上をどう生きるか考えておかなければならない。別の統計では、令和 4 年の健康寿命は男性で 72 歳、女性で 75 歳ということである。したがって、男性で 12 年程度、女性で 15 年程度は、これまでの経験や知識を生かしたり、学び直し（リスキリング）などして、仕事を続けたり、新しい仕事を始めたりできる。その後で、男性で 10 年近く、女性で 12 年程度の支援や介護が必要ということになるのだろうか。

最近、こうした統計などを意識しながら、我が国の高齢化社会を支援や介護などの対応策としてだけでなく、何かイノベティブな感覚で捉えられないかと考えてきた。言葉として参考になるのは、2005 年にスタンフォード大学のロンダ・シービンガーが提唱した「ジェンダード・イノベーション（GI）」である。これは性差をポジティブに捉えてイノベーションを起こそうというもので、世界各国で取り上げられ、我が国でもお茶の水女子大学をはじめとしていくつかの大学でも取り組まれ、また、経団連も注目をし始めている。

この言葉をヒントにして生成 AI との対話もして、「シルバード・イノベーション（Silvered Innovations、SI）」という言葉を作った。シルバード・イノベーションとは、高齢者を支援や介護の対象としてだけでなく、新しい価値創造の担い手として位置づける考え方である。定年後の人生を単なる余生ではなく、社会に新しい価値を生み出し、変革をもたらす活動のための期間として、社会の中に位置づけられないかという思いからである。これまでの社会では、「教育を受け、働き、そして引退する」という三段階のプロセスとして定着してきた。定年制度や役職定年という仕組みも、プロセスの中に位置付けられた慣習である。

もちろん、長く働いた後にしばらく休息の時間を持つことには意味がある。これまで十分に時間を取ることができなかった旅行や趣味に没頭してみることは、人生の後半における一つの楽しみでもある。しかし多くの人は、そのような生活をしばらく続けるうちに、もう少し社会と関わっていたいと思うようになるのではないだろうか。完全に仕事から離れてし